



Title	レトリックの構造と論理 : アブー・タンマーム詩に即して
Author(s)	岡崎, 桂二
Citation	関西アラブ・イスラム研究. 2002, 2, p. 25-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105817
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

レトリックの構造と論理 ——アブー・タンマーム詩に即して

岡崎 桂二*

The Structure and Logic of Rhetoric in Abū Tammām's Poetry

The Ode on Amorium of Abū Tammām is celebrated for its highly ornated style among western critics as well as Arabian connoisseurs. It opens by the following line; *the sword is more truthful in information than the book, in its edge (ḥadd) lies the boundary (ḥadd) between earnestness (jidd) and sport*. In this single line, the prominent features of his artificiality are condensed: antithesis (earnestness and sport), jinās (ḥadd). The first ḥadd means “edge”, while the second one “boundary”. The jinās (paronomasia), between words formally identical but semantically different, is named “perfect jinās” and moreover ḥadd and jidd graphically form jinās in an undotted text.

This kind of highly trope laden verse is traditionally regarded as Badīʿ, and Abū Tammām is a recognized master of the school but criticized for the excessive use of rhetorical devices in his poetry. In my opinion, the intricate figures of speech employed in his work are not embellishment or play on words, but function as a key to make up a general structure of the text and emphasize its theme.

This essay is an attempt to investigate the question as to what structure the poem is composed of and how closely rhetoric and his concept of poetry are intertwined with each other. The study will reveal that there lie four elements in inducing the poet to compose the ornate text; 1) his personal predilection for pun and paronomasia, 2) competition among poets under the new urban milieu, 3) the transition from orality to literacy in poetry, 4) the Muʿtazilite's way of thought.

序 章

本稿は代表的な技巧派詩人 (maṣnūʿ) であり、バディーウの第一人者とみなされているアブー・タンマーム詩において、作中のレトリックが単なる文飾にとどまらずに、詩全体の構造を支える要として機能し、またレトリック

* 四天王寺国際仏教大学 教授

において、この詩人の思考と表現がいかに密接なつながりを有しているのか、の2点を明らかにすることを目的としている¹⁾。

題材として、アッバース朝第8代カリフ、アルムータシム (在位833年-842年) のビザンツ遠征をテーマとする詩を取り上げる²⁾。b音を脚韻とするこの詩 (bā'iyyah) は、レトリックを多用するいわゆるバディーウ詩の傑作として名高く、また近年、この詩を対象とする研究も増えてきており、それらの蓄積に基づいて分析を進める³⁾。

この詩はカリフのアモリウム攻略 (838年) を題材とした全71行の長大なものであるが、その内容から7つの部分に分けることができる⁴⁾。

- a. 1行~12行 占星術師の予言を覆すムスリム軍の勝利
- b. 13行~22行 難攻不落のアモリウムの描写
- c. 23行~35行 壮絶な攻略戦と炎上する都市の描写
- d. 36行~49行 カリフ、アルムータシムへの賞讃
- e. 50行~61行 ビザンツ皇帝、テオフラトスへの誹謗
- f. 62行~66行 都市攻略と凌辱の比喻
- g. 67行~71行 天祐神助を得た勝利者としてのカリフの賞讃

ともに武力によるカリフの征服の成就を誇る内容により、冒頭の a と終結

1) Abū Tammām Ḥabīb ibn Aws al-Ṭā'ī (805?-845?) は、シリアのキリスト教徒の家に生まれ、イスラムに改宗するとともに、タイイ部族との血縁を自称する。カリフ、マームーンやムータシムを筆頭に、貴人たちの頌詩を詠み、名声を馳せる。しかし、レトリックを多用する詩風は、守旧派の人々から激しい非難を浴び、彼の詩の評価をめぐる論争からアラブ詩論が生まれる端緒をなした。弟子であり、自然詠を得意とした天性詩人 (maṭbū')、ブフトゥリーと常に比較さる。独自の審美眼を発揮して編集した『ハマーサ詩集』で不朽の名を残している。Klein-Frank, 1, pp. 14-28, Petit et Voisin, pp. 63-64.

2) 最も手近な対訳テキストは Arberry であり、訳文の一部は Badawi (1990) に再録されており、Stetkevych (1991) は原文と英訳を載せている。フランス語の対訳としては O. Petit et W. Voisin があるが残念ながら一部分に止まっている。また Bencheikh (pp. 129-130) は30行までの仏訳。この詩の分析は前記の Stetkevych と O. Petit et W. Voisin が総合的に行い、Hamori (1967, 1974)、Badawi (1978) は作中のレトリックに焦点を当てたモノグラフ。アラビア語では Dayf が代表的なものだが、バダウィーが評するように一部を除いて伝統的な語句の解釈に終始している。cf., Badawi (1978), p. 56.

3) バディーウとはバッシュアル・ブン・ブルド (d. 784)、あるいはムスリム・ブン・アルワリード (d. 823) を創始者とする、新奇なレトリックを多用する一群の詩に対して付けられた呼称。Stetkevych, p. 5 ff., Schoeler, pp. 283-286, Bonebakker, Abu Deeb, pp. 346-348, Ouyang, pp. 110-115, pp. 130-146. 特にバッシュアルとバディーウの関連については岡崎「バッシュアル・ブン・ブルドとバディーウ」と「アラブ古典詩研究」参照。

4) この詩の内容による区分は上記注2に示した研究者が行っているが、互いに微妙な相違をきたしている。Hamori は12行目までを a 部としているが、Badawi と Petit et Voisin は10行目までとする。他方、Stetkevych は11行までとする。筆者は占星術師への攻撃は12行目まで続き、以後新たなモチーフが展開されると考える。いずれにせよ、11行から13行はイメージ的に連続しており、どこを切れ目とするかの確定は難しい。

部の g は見事に呼応しており、この詩のメインテーマがカリフへの賞讃であることを示している。そして d と e において、カリフの賞讃とビザンツ皇帝の誹謗という対立表現でこのテーマをより一層明白に浮かび上がらせる。さらに b と f において、征服前のこの都市の壮麗な姿と、その後の灰燼に帰した様を対比的に描写する。詩人は難攻不落の都市を擬人法を用いて女性として描き、それゆえに、都市攻略を凌辱行為に準える、というこの詩に底流するもうひとつのテーマがこの2箇所において詠われている。

かくしてこの詩は、男性－女性、賞讃－誹謗、整然－混乱、勝利－敗北、と全体に対比的な構造を持つことが分かる。以下にその全体的な対比構造が、詩の細部にわたっても張りめぐらされており、詩の各部がその構造に沿っていかに緊密に結び合わさっているのかを検証する。長大な詩であり、紙幅の関係上、占星術師の予言の不当さを一蹴した詩の冒頭部 (a) と、この詩のメインテーマであるカリフを賞讃する終結部 (g) を対象とする。

第2章 剣と書－冒頭部のレトリック

ジャーヒリーヤ期以来の伝統に逆らって、詩人はいきなり本題に入る⁵⁾。

第1行 as-sayfu aşdaqū an bā'an min al-kutubi
 fī ḥaddihī l-ḥaddu bayna l-jiddi wa-l-la'ibi
 第2行 bīḍu ṣ-ṣafā'ihi lā sūdu ṣ-ṣaḥa'ifi fī
 mutūnihinna jalā'u sh-shakki wa-r-riyabi
 第3行 wa-l-'ilmu fī shuhubi l-'armāhi lāmi'atan
 bayna l-khamīsayni lā fī s-sab'ati sh-shuhubi

剣は書よりも真実を伝え、

その鋭き剣先こそ、真剣さと気紛れさを分かちもの

白く輝く切っ先と、黒き文字連ねし書、

疑念を晴らすは剣の幅広き刃、

5方向より繰り出す煌く槍こそ知識の源、

7つの天体、いかなる知識をもたらすや

ムータシムの遠征に際して、占星術師たちはカリフの実力を侮り、無花果の実が熟すまでは彼には勝算が見込まれないと予言していた。だが現実には、カリフの果敢な行動により、占星術師たちの予言は一蹴され、完全な勝利が

5) イブン・クタイバ (d. 889) によって、カスィーダは導入部のナシーブ (恋愛歌)、展開部のラヒール (騎旅)、終結部のマディーフ (賞賛) という3部構造を持つと定式化されたが、イスラム勃興後、時代を下るごとにこの形式に当てはまらない詩が多い。Badawi (1990), p. 157, S. Sperl & Ch. Schacle, in Montgomery, p. 9, p. 11, Stetkevych, pp. 6-16.

カリフにもたらされた。この文 (占星書) と武 (刀剣) が引き起こした明白な結果の相違を、反意法 (ṭibāq) と同語根法 (jinās) の二つのレトリック技法を駆使して描き出す。

第1句の下半句で、ḥadd (刃、切っ先) と ḥadd (境界) の2語でジナースを形成して、「切っ先が(真剣さと気紛れさを)分かť」、と剣の持つ威力を簡潔に述べる。それとともに、この ḥadd は jidd (真剣さ) とともにジナースを成しており、「剣」と「真剣さ」の密接なつながりを示す。さらに字形からして、ḥadd と jidd は文字に添えられる一個の点を除いて全く同形となり、そのような形式のテキストで母音点も付けないと、第1句下半句に同綴の語が3個並置されることになる。もしアブー・タンマームがここまで周到に語の配置を考えていたとすれば、これこそ「文字の文化」の思考法が生み出したレトリックと言えよう⁶⁾。

さらに剣と真剣さの緊密な結びつきに対して、kutubi (書物) と laʿibi (遊戯) に韻を踏ませてこの両者の関連を暗示させて、剣を揮う者の真剣さと、星任せの占い師たちの気紛れさを対比させている。このような文と武の異同を、反意法と同語根法を介して明らかにしようとする創作意図は、第2句において一層鮮明になる。

まず上半句の bīd (白) と sūd (黒) の近接音で構成されている2語で反意法を形成し、白く輝く剣と、黒き文字で綴られた占星術書の換喩とする。さらにこの2語にジナースを成す ṣafāʾiḥ (「剣 ṣafīḥa」の複数形) と ṣaḥāʾif (「紙 ṣaḥīfa」の複数形) を後置して、白と黒の意味を確定させるとともに、剣と占星書の特質を浮かび上がらせる。

これらに続く「mutūnihinna」という語は懸詞の役割を果たしており、matn (剣の広刃の部分) と matn (文章・本文) という、異義素から成る同形の複数形である。それゆえ、この「mutūnihinna」という語は、前置の ṣafāʾiḥ と ṣaḥāʾif の2語と同工の語形成でできており、文と武の対比を一語に凝縮する役割を担っている。

さらに、第1句と第2句は、「~の中に…がある、fī ~」という同一の文章構造を有する。そしてこの後続の ḥadd と mutūn の2語はともに二義を含む懸詞で、共通して剣の意味を優先させているので、第1、2句はパラレリズムを成し、合わさって剣の要素を強調する働きをしている。

6) De Young, p. 186, Cachia (1988) は、同語根法の理解には、鋭い耳と眼、そして明敏な心が要求されると説く。p.225. ハンマード編纂の『ムアッラカート』を嚆矢にアラブ詩は口承を脱して書記の時代に入った。詩集は文法学者の研究用コーパスであるとともに、詩人たちに膨大な題材を提供した。口承文化と書記文化には明白な思考法の差異があり、詩作にも影響していることはオングが明らかにしている。W. J. オング (桜井・林・糟谷訳)『声の文化と文字の文化』藤原書店、1991年。

そして比喩の面から見ても、この第2行は重要である。第1行で剣の行使が真実をもたらすことが明らかにされ、それを受けて第2行では、白く輝く剣こそ疑念や疑心を一扫すると剣の威力を力強く描写する。そこにはこの詩全体を貫く白→剣→正義・真実→真白き顔（の美人の獲得）というプラス方向の意味派生と、黒→書物→不正・虚偽→黒煙（に包まれる都市）というマイナス方向への意味派生の対立構造が埋め込まれている⁷⁾。

この白と黒の対比は、第3行において明⇔暗の対立として描かれる。キラリと煌く槍のもたらす知識 (ilm) は光輝く (lāmi'a)、と武器の威力を示すが、ilm と lāmi'a の2語において、語根を形成する3つの文字の順序を並び代えるジナースの一技法を用いて、知識と栄光の緊密な結びつきを強調している。

さらに、「火焰」と「天体」という異なった意味を同一の単語 (shuhub) に担わせて懸詞としているが、第1、2行の整然たるパラレリズムとは違って、fi shuhubi l-armāhi と fi s-sab'ati sh-shuhubi、と統語上異なった位置を同音異義語に与えて、詩の流れに変化をもたらしている。

またこの懸詞の間に、軍勢と天体の対照を5と7との具体的な数字で表し⁸⁾、第3行全体で、槍と星という共に光り輝くものでありながら、前者のもたらす知識の方がより一層輝かしいものである、と第1、2行と同様の主張を繰り返す。

かくして冒頭の3行において、この詩のテーマであるビザンツ側の暗き予言、邪悪な虚言に対して、ムスリム軍が正義の戦いを挑み、歴史の真実を明らかにしたことが、ジナース、反意法、懸詞を駆使して描かれていることが知られよう。そして、このビザンツ軍とムスリム軍の運命の明暗を引き起こす一因となった占星術師の行いを、a部でさらに執拗に描写し、予言の嘘を暴く。

第7行 wa-khawwafū n-nāsa min dahyā'a muḏlimatin
idhā badā l-kawkabu l-gharbiyyu dhū dh-dhanabi

暗黒の凶事を占いて人心を震いあがらせる、
西の方、長き尾を引く星現われし時、

この行においても、muḏlimat (暗黒) と kawkab (星) で反意法を形成している。そして、漆黒の空に明々と輝く星が、逆に暗い災難、暗澹たる将来を予想させるという逆説により、複雑に明と暗とを交錯させている。この明と暗の逆転現象をジナースと反意法を用いて表現する技法が、c部の征服され、黒煙を上げて燃え盛る都市の描写において用いられている。

7) Stetkevych, p. 200.

8) 5は本隊、左右、前後の軍勢をあらわし、7は太陽、月、火星、水星、木星、金星、土星を表す。
Petit et Voisin, p. 82, Arberry, p. 51.

第28行 daw'un mina n-nāri wa-ḡ-ḡalmā'u 'ākifatun
wa-ḡulmatun min dukhānin fī ḡuḡan shahībi

燃え盛る焰、漆黒の闇夜を赤く染め、
立ち上る黒煙、日輪を覆い尽くして光遮る、

戦火が夜空を赤く照らし、まるで白昼のように明るく感じられ、逆に舞い上がる黒煙は空を覆い尽くして日の光を遮り、あたりはまるで夜のように真っ暗だ。アーベリーが完璧と評したように、昼と夜、光と闇とが完全に逆転してアモリウムを焼き尽くし、灰燼に帰した様を、ジナースと反意法というレトリックの力で描ききっている⁹⁾。それとともにレトリックを通して、この昼夜の逆転をもたらし、自然の運行を遮ったのは、他ならぬカリフの果敢な行動であり、武力の行使であることをまざまざと想起させ、占星術の無力さを浮かび上がらせる¹⁰⁾。

かくして、a 部を締め括るように、第11行においてイスラム軍の勝利を高らかに詠いあげる。詩人はムスリムが打ち揮う剣を悪を懲らしめる正義の刃とし、打ち払う槍に真実を明らかにする道具としての権能を付与する。

第11行 fatḡa l-futūḡi ta'ālā an yuḡīṡa biḡi
naḡmun mina sh-shi'ri aw nathrun mina l-khuṡabi

第12行 fatḡun tafattaḡu abwābu s-samā'i laḡu
wa tabruzu l-arḡu fī athwābihā l-qushubi

至高至大なるこの勝利、
文字連ねる詩でも描ききれず、言葉でも語り尽くせず、
勝利をば言祝ぎて、天の門も扉を開け、
また大地、新しき衣を纏いて現れん、

ここにおいてもジナースと反意法を基にして勝利を最大限に称賛し、雄大な調子で祝勝気分を高揚させる。さらにムスリム軍の勝利を確認するごとく反復法をも取り入れている。

この2行の冒頭部は、ともに同一語根から成る2語を併置してジナースとし、その構造を繰り返すことで勝利を強調している。それに続けて、naḡm (詩) と nathr (散文) で反意法を作り、この2語には「整然」と「散乱」という原義があることから、ことばの表層 (詩/散文) と深層 (整然/散乱) の両部分で二重の対照を作り出している。

第12行では、天と地が対照をなし、さらに fatḡ に「勝利」と「開放」の二

9) Arberry, p. 55., fn., 28.

10) Petit et Voisin, p. 85.

義を掛けて、この勝利は神の意に沿う神聖なものであり、天がその勲功を愛でて祝福の門を開ける、という新たなるモチーフを導いて、この詩のメインテーマであるカリフ賞讃への周到なプロットとしている。アモリウム攻略戦が異教徒に対する聖戦であり、その勝利が神の祝福に値することは、第11行冒頭の「勝利中の勝利」に付された「ta'alā」という神のみに用いられる形容詞が如実に示している¹¹⁾。このようにして詩の導入部であるa部において、この詩のメインテーマであるカリフ賞讃に関して、武断、敬神、正義心、といったカリフの様々な美質が占星術師との対比の中で描かれていることが知られよう。

次に異教徒征服というムスリムとしての義務を果たしたカリフを、この詩の核心部分である賞讃詩 (madiḥ) において、どのような技法を用いてその効果をあげているのかを考察する。

第3章 神の代理人～カリフ賞讃部のレトリック

詩の中心部で、アレクサンダーもペルシアのホスローにも成しえなかった難攻不落の都市攻略を果たしたカリフ、ムータシムを、詩人は複雑な詩法を用いて賞讃する。これは全71行にのぼるこの詩のほぼ中央に置かれて、全体として対称的な構造をなすこの詩の扇の要ともいえるべき位置を占めている。

第37行 tadbīru mu'taṣimin bi-l-lāhi muntaqimin

li-l-lāhi murtaghibin fī l-lāhi murtaqibi

この謀、神にすぎり、神の汚名を雪ぎ、

ただ神のみに望みをかけ、神に仕え奉る者の仕掛けしもの、

等しく派生形第8形能動分詞を4個連ね、その後「単音節の前置詞+al-lāh」という同一構文を配置させて、語形、構文、韻律、の全てにおいて完璧なバランスを保った一行である¹²⁾。さらにこの整然とした詩句の中にムータシムというカリフの名を詠みこみ、「(神に) すぎる者」という普通名詞の意味をも掛けてジナーズにしている。

このようにアラブ詩の技法を駆使して、カリフの戦いがイスラムの名誉をかけた神聖なものであり、その勝利に天祐神助があったことを高らかに宣言している。アブー・タンマームが活躍した時代、詩、特に賞讃詩は、支配者の権威や、正義、寛大、篤信、といった彼の徳目を広く世の知らしめる役割

11) *Ibid.*, pp. 83-84.

12) テクストの異同にも関わらず、同形の分詞ゆえに破綻はない。Arberry, p. 57, fn. 37, Badawi (1978), p. 54.

を担っていたが、この一行はカリフの敬神さを余すところなく伝えている。そうして詩人は以下の詩句でこのカリフ賞讃詩を締め括り、カリフの賞讃という作詩の意図を十全に果たす。

- 第67行 khalīfata l-lāhi jāzā l-lāhu sa'yaka 'an
jurthūmati d-dīni wa-l-islāmi wa-l-ḥasabi
第68行 baṣurta bi-r-rāḥati l-kubrā fa-lam tarahā
tunālu illā 'alā jisrin mina t-ta'abi
第69行 in kāna bayna ṣurūfi d-dahri min raḥimin
mawṣūlatin aw dhimāmin ghayri munqaḍibi
第70行 fa-bayna ayyāmi l-lātī nuṣirta bi-hā
wa-bayna ayyāmi Badrin aqrabu n-nasabi
第71行 abqat banī l-aṣfari l-mimrāḍi ka-smihim
ṣufra l-wujūhi wa-jallat awjuha l-'arabi

神の代理人（カリフ）よ、願わくばそなたの行いにアッラーの報奨が授けられますように、

信仰とイスラムと名誉の礎のために奮闘したそなたに、

汝、今、大いなる安楽の中に憩いしが、

（天国に至る）細き橋なくば、この憩い得られじの思いしきりなり、
人の世の有為転変を、結び合わせる縁と縁、

あるいは堅き絆にて、繋がりしものならば、
そなたが勝利をあげしかの戦、

（神の使徒の）パドルの戦いと堅くつながる、
名にし負う黄色き者の子孫、黄色きままに、

光輝くはアラブのかんばせ

ビザンツ都市攻略という偉業を、個人の野心や功名心からではなくて、信仰を守る崇高な行為であり、神の意図に沿う戦いであつたがゆえに神の援助がもたらされたと、徹底的にカリフの原義である「(神の) 代理者」の意義を強調する。詩人はその目的のためには、カリフを「神の使徒」と並置して、ムハンマドと同等の地位にまで引き上げるのも躊躇わない。

この個所で使われている技法はまたしても反意法とジナースである。第68行の休息/労苦、第69行の結合/切断、と反意法が用いられている。そして後続の第70行では、bayna ayyāmi-ka と bayna ayyāmi Badr でパラリズムを構成して変化をもたらしている。

詩の冒頭部分とは異なって、この部分の反意法の特徴は、二物の対照性を際立たせるためではなくて、一者（カリフ）の特質を強調するためにこの技法が用いられている点である。一切の事物との比較を許さず、超越的存在で

ある神と人間とを比べることはできない。それゆえ詩人は、カリフの個人的な努力を反対概念を連ねて強調し、次いで、パラレリズムで神の使徒との関連性に言及して崇高なるカリフ像を作り上げる。つまり、アモリウム攻略によって、カリフ、ムータシムは異教徒征伐という勲功によるハサブと、ジャーヒーリーヤ的な血の連帯を示すナサブとともに勝ち得たことをこれらの詩句は示す¹³⁾。

ハサブに関しては、既に第52行でカリフを *muhtasib* という語で形容し、敵将に与えた *muktasib* (報酬を求める者) と対照させている。ステトケヴィッチが説くように、ムフタシブには「(善行を積んで死後の救済を) 計算する者」という意味があり、ジナースとして「最後の審判の日 *yawm al-hisāb*」をも想起させる¹⁴⁾。このように周到に配置された語句を通して、カリフの行為が神意に適っていたことを暗示する。

第67行でカリフに関して、3人称から2人称へと人称が変化している。ここに賞讃者としての詩人 (1人称)、賞讃を受ける者 (2人称)、至高の報奨をもたらす者 (3人称) という関係が成立し、この3者は、被報奨者 (詩人・カリフ) \ 報奨者 (カリフ・神) の二重構造になっている。つまり、カリフは神に祝福され、詩人はそのカリフから報奨を受けるのである。カリフをはさんで、「詩人 ⇄ カリフ ⇄ 神」という互酬関係が形成されたのである。そのことを人称変化が示している¹⁵⁾。詩人は3人称の叙述から、ここでカリフに2人称で呼びかけ、さらに神に祝福の執り成しを要請している。職業詩人として詩作の目的が何であるのかを如実に表す個所である。

そして最終行において、この詩で多用されたジナースと反意法を用いて、ムスリムと異教徒の命運の相違を浮かび上がらせる。ビザンツ兵の「黄色 (青白) き顔」とイスラム軍の「(戦勝に) 赤く輝く顔」。戦いがもたらした明白な結果を、色彩の相違で簡潔に描き出す。しかもビザンツの敗北が運命的なものであることを、ジナースというレトリックの力で示す。この個所は直訳すると、「(戦いは) 弱々しき黄色き者の子孫を、その名通りに黄色き顔のままに留め置く」となる。注釈によれば、*al-aṣfar* (黄色) はビザンツの祖先にこの名を持つものがおり、彼らに対する通称として侮蔑的に使われていたという¹⁶⁾。物自体と分かち難く結びついている名辞、それゆえ両者の結合は運命的であり、そこから逃れる術はない。このようにして、ビザンツの敗北が不可避であったことを、ことばの性質を援用して説く。

13) Stetkevych, pp. 210-211.

14) *Ibid.*, p. 208.

15) Badawi, p. 53, Stetkevych, pp. 210-211.

16) Abū Tammām, *Diwān*, vol. 1, pp. 73-74, Arberry, p. 62, fn., 71, Stetkevych, p. 196, fn..

後述のように、アブー・タンマームは固有名詞のもじりを偏愛した。地名に言及する必要に迫られれば、必ずそのもじりを考え出したと言われている。彼のこの個人的な資質、あるいは、「名は予兆 *nomen est omen*」という前近代社会に共通の観念¹⁷⁾、語源の知識、これらが合わさってアブー・タンマーム詩を特徴づけるジナースの頻出を生み出しているのかもしれない。

さてカリフは自身の果敢な行為により異教徒征伐を成し遂げ、勝利感と信仰護持が合わさって、心からの充足 (*rāḥa*) を味わっているが、いま一つ別の要素が彼の五体を満足感で満たしている。

既に a 部の終結部で現れていたように、この詩には性的なイメージが横溢している。戦いに必然的に付随する掠奪や婦女子に対する暴力行為、否、戦闘そのものが人間の闘争本能を刺激し、満足させる。異教徒征服という大義名分はあっても、戦闘の現実は何ら他の戦いと変わるところはない。カリフを筆頭にムスリム軍は、処女に準えた都市を攻撃し、破壊し尽くす。詩人は都市と乙女をオーバーラップさせて伝統的なナシーブ (恋愛詩) とし、都市 (= 女) を征服し、満足感に浸るカリフの姿を暗示的に描く¹⁸⁾。

第11、12行で、*fataḥ* (開放、勝利) という性的イメージを喚起する語を受けて、b 部ではアモリウムの町は常に女性として擬人化されていた。女の一生を逆に辿るごとく、この町はまず母 (*umm*) という語で表わされ、次いで美女 (*barzatu l-wajh*)、そして処女 (*bikr*) として形容されていた。ホスローやアレクサンダーの侵略をも跳ね返した難攻不落のこの美しい町。その町が今や灰燼に帰し、黒煙に包まれている。詩人はその光景をどんな男の要求をも拒む美女に例え、灰にまみれ、煤けた頬も、なお人を魅惑する、と述べる。この二重写しの戦闘行為と凌辱行為が一体化するのが、g 部の最終部である。

第66行 *bīḍun idhā ntūḍiyat min ḥujbihā rajaʿat*
aḥaqqā bi-l-bīḍi abdānan min al-ḥujubī

白く輝く剣、ひとたび鞘から抜かれるや、
ヴェールより真白き体を取り返す

「鞘から引き抜かれた剣」というあからさまに性的なイメージを喚起する表現と、そのイメージを増幅させる *ḥujub* という掛詞。「*ḥujub*」には「覆う

17) Hamori (1967), p. 88, Stetkevych, p. 211. アブー・タンマームも「彼女たちは鳩 (*ḥamām*) だが、文字の *h* を [*i*] で読めば、その名も運命 (= 死、*ḥimām*) と変わる」という誹謗詩を詠んだ。

18) 都市を女性に準えるのは『旧約聖書』を筆頭に、少なくともセム語社会では古くから行われていることである。特にアラビア語では、大地 (*arḍ*) や都市 (*madīna*) という単語は女性名詞であり、さらに地名は女性名詞として扱う文法規則があるので、この両者は容易に結び付く。近年のパレスチナを題材とする詩では、奪われた土地を恋人に準えることが一般的。cf., Badawi (1978), p. 52, De Young, p. 189, Stetkevych, p. 203, p. 209, Hamori (1967), p. 87.

もの」の原義があり、ここでは「鞘」と「ヴェール」の2義で使われており、女性との関係を強く想起させる。さらに、bid も掛詞として用いられており、「白い」の原義から、「白く輝く剣」の意と「真白き顔・体」の2つの意味が込められており、同一の語を象徴的に男性と女性を表わすために使っている。さらにこの bid の語には「卵」という生殖に関わる意味も込められていると主張する研究者もいる¹⁹⁾。

かくして、都市攻略を果たしたカリフ、ムータシムは戦いの勝利と女性征服の二つを同時に遂げて、大いなる充足感に浸っているのである。戦勝と女性攻略による同時満足というこの詩に底流する主旋律は、詩の中央部分に置かれているカリフ賞讃部分で既に示されていた。

第38行 wa-muṭ‘ami n-naṣri lam takham asinnatuhu
yawman wa-lā ḥujibat ‘an rūhin muḥtajibi,

(カリフは) 勝利を味わい尽くし、その槍先鈍る時なし、
守り固めし魂も、そこより逃れる術はなし、

「勝利を味わう」という直截で感覚的な表現でカリフの性向を示唆し、後半句の ḥujibat と muḥtajib とのジナースは、第66行と同じく強く女性との関連を喚起するので、この一句はカリフの暴力的な隠された一面を暗示している²⁰⁾。また rūh (魂) という語は第68行の rāḥa (休息) と語源を同じくしており、この語を介しても詩中2個所のカリフ賞讃詩の緊密な繋がりが知られうる。

だが詩人はカリフのこのような荒々しい欲望をレトリックに包んでその実体を露にせず、暗示に止める。いやそれどころか、先述のように詩の最終部で、対ビザンツ戦をバドルの戦いに準えることで、これが聖なる戦いであったことを示すとともに、カリフと神の使徒、ムハンマドとの繋がりを想起させて、カリフの原義である「(神の) 代理人」という意味を際立たせる。異教徒征伐という大義名分の下に、カリフの個人的な欲望はその姿を消されている。聖なる行為か、性にまつわる欲望の発露か。その虚実を分かち薄い皮膜をレトリックが支えている。ゆえに、この何れが真実であるのかは読者(=聴き手)のレトリック理解力に委ねられている。アブー・タンマームの詩に対して常に投げかけられる、難解、無意味、狂気の作、という非難は、彼のこのような作風のもたらす結果である²¹⁾。彼は詩中のレトリックを文飾に止めずに、認識の道具として活用している。

19) Stetkevych, p. 210.

20) Hamori, p. 86.

21) アブー・タンマームは「なぜ理解されるように詩を書かないのか」と詰問された時に、「なぜ詩の意味が分からないのか」と反問したという。Klein-Franke, 1, p. 31, Schippers, p. 253, Lyons, p. 61.

昔も今も、詩は万人に開かれたものではない²²⁾。特にアブー・タンマームが生きた時代、詩は共通の教養 (= アダブ) を有する人々の狭いサークル内でのみ享受されていた。ライバルたちに挑戦するかの如く、アブー・タンマームは意想外の比喻を考案し、難解な謎を仕掛けて相手の理解力を試す²³⁾。

かくしてこの詩は、剣が代表する荒々しいカリフ賞讃をテーマにしながら、その底流に、都市を乙女に準えてその崩壊 (= 別離) を歎く哀歌という要素を隠しもつ。その2つの要素を、レトリックを駆使して描きだしていた。そして全編を通して多用されていたジナースや反意法は、単なる文飾に止まらずに、男女、正邪、明暗、敬神・流神、等々の対立を生み出して、その2要素を浮かび上がらせる道具の役割を果たしていた。洋の東西を問わず近代文学においてレトリックは、ともすれば内容理解を妨げるものと忌避されがちだが、この詩、否、アブー・タンマームの他の詩においても、レトリックこそがその内容を支える核として機能している。

第4章 レトリックの論理

最後にアブー・タンマームはなぜかくも執拗にレトリックに拘るのか、その理由を考えておこう。その理由の一つに、固有名詞に対する偏愛とまで称される彼の資質が挙げられよう。詩人は地名に関して、そのもじりを思いつくまで落ち着かなかった、というエピソードを残しており、あらゆる機会を捉えて人名、地名を下敷きにしてジナースを試みた²⁴⁾。この詩においても、カリフ賞讃の要である第37行において、彼の詩風のこの特徴がよく出ていたし、最終部のビザンツ軍の誹謗においても同様である。「名は予兆」という前近代の思考の発露であると同時に、指示するもの (音) と指示されるもの (意味) が緊密に結び付いている固有名詞の特質を、鋭敏に察知した彼の言語能力のなせる業でもあろう。

ジナースは単なる懸詞や語呂合わせではない。ジナースにはアラビア語を含むセム系言語に共通した言語意識が関わっている。語形成における「語根」の存在とジナースは密接な関係を有する。語根を形作る3つの子音の順番を並べ変えたり、語根の3子音の一つを入れ換えたりする方法、あるいは同語

22) Cachia (1988), p. 225, Klein-Frank, I, p. 31.

23) 彼はライバルを立腹させることを承知の上で、複雑な比喻を自作に埋め込んだ確信犯であった。Schippers, p. 259. 詩の受容者側 (= 聴き手) からすれば、韻律やジナース、懸詞、対句、等々を手掛かりにして、詩人の意図を早かに察知し、朗誦される詩の展開を予想するという知的なゲームも楽しむことができる。Semah, p. 92.

24) アブー・タンマームは詠みこまなければならない地名や出来事に直面すると、その名の振りや、それらに因む言葉遊びを思いつかないと、罪悪感に襲われたり、重大な使命を果たしていないように感じた。Klein-Frank, I, p. 27, Hamori, p. 83, Stetkevych, p. 27,

根から次々に派生形を生み出す方法、とジナースのいずれの技法も語根と深い繋がりを持つ。例えば、共に「誉める」を意味する *ḥamada* と *madaḥa* はジナースを作り、また *najasa*、*sajana*、*nasaja* 各語は互いに親縁関係を形成しており、通底する語源的意味を感じ取る²⁵⁾。このような方法で語根を操作するジナースは、龐大な語彙力のみならず、すぐれて知的操作を必要とする。『ハマーサ詩集』に結実した彼の古詩や古語に関する幅広い知識とアラビア語の特質が結び合わさって、アブー・タンマーム特有の複雑なジナースが生み出されたと考えられよう²⁶⁾。

また別な理由として、詩人が置かれていた社会状況がある。部族の代弁者の立場を脱して、一人の自立した芸術家となった詩人が、独自性を発揮できるのは修辞面に限定されていた。詩の受容層の保守的な嗜好、韻律に関するアラブ詩の厳しい制約、賞讃や誹謗という限定された内容。このように内容 (*ma'nā*) と形式 (*lafz*) の両面で縛られていた詩人たちの創造力は、いきおい斬新な比喻や新たな修飾といった技法面で発揮されるようになった。従来使い古された詩語を新たなコンテクストに置き、その語に内包された意味を解放させる。また、平凡な2語を並列、あるいは対立させて意外なイメージを作り出す²⁷⁾。詩人たちのこのような意識的な創作姿勢がバディーウを生み出したのである。

詩の変革期と呼ばれる文学環境のこの変化の中にアブー・タンマームも置かれ、彼はバディーウの第一人者とみなされるようになった。それゆえに、彼の作品中のレトリックは、文法学者を中心とする保守的な批判者が非難したように、単に量的なものではなく、質的な転換をもたらしていたのである²⁸⁾。彼は自然の風物を精緻に、より真実らしく描写しようという旧来の詩風を脱して、事物を新たな相の下に見、その物に隠された本質を看取して詩中に配置し、斬新な効果を生み出そうと努力したのである。この目的のためには彼は手段を選ばない。彼がしばしば非難される、砂漠の民の言葉と都会風の表現の混交、文法用語や哲学用語の使用、といった彼の詩の特徴は、意

25) アラブ修辞学では、同語根からの派生形で形成されているジナースを *ishtiqaq* (派生語) と名づけて最上のジナースと見做している。また、本稿で分析の対象にした詩の第1行の *ḥadd* のごとく、同音、同形で、かつ互いに違う意味を有する2語の並列は、「完全ジナース *jinās tāmm*」と呼ばれて評価されている。De Young, pp. 183-188, Gelder, pp. 394-395, Cachia (1998), pp. 31-32.

26) 『ハマーサ詩集』は一貫して独自の審美眼に基づいて編纂された詩集で、独創的な編纂法と斬新な選句で高い評価を受けている。cf., Klein-Frank, Lyons, Oyoung.

27) アブー・タンマームは、平凡な語を構成位相に置いて他の語と並置し、新たな概念を生み出す技法でも特異さを発揮した。cf., Schippers.

28) 『バディーウの書』を著したイブン・ムータッズや、『アブー・タンマームとブトゥリーの比較考量』を著したアーミディーらの批判者は、何よりアブー・タンマームのレトリックの過剰さを攻撃し、逆に彼の修辞は古来から使い古されたものであり、その模倣、あるいは盗用に過ぎないと見做していた。Hamori (1967), p. 83, Bencheikh, p. 63, Schippers, p. 254.

図的・自覚的な創作態度から生まれている²⁹⁾。アブー・タンマームが技巧派詩人の第一人者と見做される所以はここにある。

さらに、バディーウを生み出した思弁的傾向もレトリックと関係している。イブン・ムータッズ (d. 908) が『バディーウの書』を書いた目的は、バッシャールを筆頭とする新傾向の詩の技法が、新奇なものではなくて、既にジャーヒリーヤの古詩やコーランで用いられていることを論証することであった。彼はバディーウ (新奇体) の特徴を5つに分類し、その各々が既に用いられている技法であると論駁したが、「カラーム表現 al-madhhab al-kalāmī」に関してだけは、コーランやその他の資料から例証を挙げることができなかった。この事実は、カラーム表現こそがアッバース朝期に出現した真に新しい技法であり、変貌した社会や変化した人々の嗜好に合致した斬新な詩法であることを、雄弁に物語っている。

「カラーム表現」とは思弁的、論理的な表現方法のことで、イスラム神学を意味する「カラーム」との関連で、合理的な思考や解釈を行おうとするムータジラ派に特徴的な言語表現を指す。ことばは二項対立の形式で観察した時に、最も明白にその意味を現す。「母」なる語は、「子」と縦の関係を、「父」とは横の、そして「おふくろ」とは類似の関係を有し、さらに「妻」とは女性性を軸にした関係を有する³⁰⁾。このように網の目のように張りめぐらされた関係性、特に対義性、に着目することで、ことばはその隠された意味を明らかにする。この詩に横溢する男\女、正\邪、白\黒、明\暗、という二物を対立させてその特質を明らかにしようとする思考こそ、ムータジラ派に特徴的な思考法である。詩人はあるものを描写の対象に選び取った時、そのもののの中に隠された関係性を見抜き、それらの構造を明らかにすることによって、全体像を提示する。逆に、表現の対象が何らかの関係に基づいて構造化されていれば、一部分からだけでも全体が推し量れよう³¹⁾。分析の対象にしてきたこの詩がまさにそうである。正邪、明暗、等々の全体の構造が細部にまで及んでいた。アブー・タンマームの新奇な詩法は、その時代の思想と深

29) アブー・タンマームが活躍する頃には、既に沙漠の遊牧民の表現 (badawī) と都市定住民の表現 (ḥaḍarī) は明白に区別されており、詩作における混交は厳しく戒められていた。それゆえ、彼が遊牧民の衣装を纏ってカリフ、マームーンに伺候し、都会風のディクショで詩の朗誦を始めると、あまりの異様さゆえに、詩人はカリフの勘気に触れ、以後宮廷から遠ざけられたという逸話が、この状況を表している。Klein-Frank, I, p.6. またこの詩人が好んで文法用語や哲学用語を詩語として用いた例として、ある賞讃詩で「(酒は) 愚かな女だが、その泡、動詞 (af'al) と名詞 (asmā) が戯れる如くに、オレの頭と遊び呆ける」と詠い、1行において「(酒は) ジャフム派の説く解釈のようだ、彼らは物の本質 (jawhar) と名づけているがね」が挙げられる。Dīwān, vol. 1., pp. 29-30, Schippers, p. 253.

30) 佐藤信夫、141ページ。

31) 上掲書、297ページの池上嘉彦の解説。

く関係している³²⁾。

アブー・タンマームにとって、詩作は刀鍛冶の作業に等しい。鉄は熱を加え、辛抱強く鍛えなければ、無用の塊に過ぎない³³⁾。言葉もまた同様。その響き、内包する意味、発散するイメージ、派生する関連語・同意語・反意語、等々の可能性を探る。このような苦吟と称される努力 (takalluf) を経て彼の詩は出来上がっている³⁴⁾。アブー・タンマーム詩の核心はレトリックにある。この詩人にとって修飾を施さない素の表現は考えられない。最も素直に感情が発露されると考えられるわが子の死を悼む挽歌においても、その名の振りを詠み込む³⁵⁾。ここに芸術家としての彼の矜持を見るべきか、はたまた、習い性となった詩人の悲しき性を読み取るべきか。その判断は読者のレトリック感覚に懸かっている。

[テキスト・訳注書]

- Abū Tammām, *Dīwān Abi Tammām bi Sharḥ al-Khaṭīb al-Tibrizī*, ed. Muḥ. ‘Abduḥ ‘Azzām, 4 vols. (Caro, 1951).
 Arberry, A. J., *Arabic Poetry: A Primer for Students* (Cambridge, 1965), pp. 50-63.
 Badawi, M. M., “The Function of Rhetoric in Medieval Arabic Poetry: Abū Tammām’s Ode on Amorium,” *JAL*, 9 (1978), pp. 43-56.
 Dayf, Shawqī, *al-Fann wa-Madhāhibuh fī al-Shi‘r al-‘Arabī* (Cairo, 1987), pp. 256-262.
 Hamori, A., “Notes on Paronomasia in Abū Tammām’s Style,” *Journal of Semitic Studies*, 12 (1967), pp. 83-90.
 ———, *On the Art of Medieval Arabic Literature* (Princeton, 1974), pp. 125-134.
 Al-Ḥawī, Iliyā, *Sharḥ Dīwān Abi Tammām* (Beirut, 1981), pp. 22-33.
 Petit, O. et Voisin, W., *La Poésie arabe classique* (Paris, 1989), pp. 75-89.
 Stetkevych, S. P., *Abū Tammām and the Poetics of the ‘Abbāsīd Age* (Leiden, 1991), pp. 187-211, pp. 375-378.

[参考文献]

- Abū al-Anwār, Muḥ., *al-Shi‘r al-‘Abbāsī: Taṭawwuruh wa-Qīyamuh al-Fanniyya* (Cairo, nd.).
 Abu Deeb, K., “Literary Criticism,” *CHAL*, pp. 339-387.

32) アブー・タンマームとムータジラ派との親密な関係は、この派の高名なカーディーであるイブン・アブー・ダーウィドが、彼とカリフ、ムータシムとの面会の手筈を整えたことでその一端が知れる。Schippers, pp. 249-250, Stetkevych, pp. 15-16, p.19. またこの特徴的な表現ゆえに二元論的思考を行うマニ教の信奉者の嫌疑をかけられたことがあるが、その信憑性は薄い。Klein-Frank, 1, pp. 15-16.

33) Lyons, p. 59.

34) 元来この語は「努力」を意味していたが、アブー・タンマームの作に対する批評語として、「人工的」「技巧的」の意味で使われるようになった。Bencheikh, p. 83, Schippers, p. 251. まことにこの評語はアブー・タンマームの創作態度を見事に表しており、彼にとって、「脚韻と努力 (al-māsā‘i) は真珠を結び合わす紐のようなもの」である。Lyons, p. 57, *Dīwān*, vol. 1., p. 421.

35) Badawi (1990), p.158.

- ‘Alī, Aḥmad Muḥ., *Dirāsāt fī ‘Ilm al-Badī‘* (Cairo, 1986).
- al-Āmidī, Abū al-Qāsim al-Ḥasan b. Bishr, *al-Muwāzana bayna Shī‘r Abī Tammām wa al-Buhturī*, 2 vols. (Cairo, 1972).
- Badawi, M. M., “‘Abbasid Poetry and its Antecedents,” *CHAL.*, pp. 146-166.
- Bencheikh, J. E., *Poétique arabe: prec. Essai sur un discours critique* (Paris, 1975).
- Bonebakker, S. A., “Ibn al-Mu‘tazz and *Kitāb al-Badī‘*,” *CHAL.*, pp. 388-411.
- Cachia, P., “From Sound to Echo in Late *Badī‘* Literature,” *Journal of the American Oriental Society*, 108 (1988), pp. 219-225.
- , *The Arch Rhetorician or the Schemer’s Skimmer* (Wiesbaden, 1998).
- Gamal, A. S., “The Basis of Selection in the *Ḥamāsa* Collections,” *JAL*, 7 (1978).
- Gelder, G. J. van, “Arabic Poetics and Stylistics according to the Introduction of *al-Durr al-Farīd* by Muḥammad Ibn Aydamir,” *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, 146 (1996).
- Heinrichs, W., *The Hand of the Northwind: Opinions on Metaphor and the Early Meaning of isti‘āra in Arabic Poetics* (Wiesbaden, 1977).
- Ibn al-Mu‘tazz, ‘Abd Allāh, *Kitāb al-Badī‘*, ed. I. Kratchkovsky (London, 1935).
- Klein-Franke, F., “The *Ḥamāsa* of Abū Tammām,” I & II, *JAL*, 2 (1971), *JAL*, 3 (1972).
- Lyons, M. C., “Notes on Abū Tammām’s Concept of Poetry,” *JAL*, 9 (1978).
- Montgomery, J. E., Allen, R. M. A. (eds.), *Qasida Poetry in Islamic Asia and Africa*, vol.2: *Eulogy’s Bounty, Meaning’s Abundance; An Anthology* (Leiden, 1996).
- Ouyang, W. C., *Literary Criticism in Medieval Arabic-Islamic Culture: The Making of a Tradition* (Edinburgh, 1997).
- Sadan, J., “Maidens’ Hair and Starry Skies,” *Israel Oriental Studies*, 11 (1991).
- Schippers, A., “The Genitive-Metaphor in the Poetry of ‘Abū Tammām,” *Proceedings of the Ninth Congress of the Union Européenne des Arabisants et Islamisants* (Leiden, 1981).
- Schoeler, G., “Bashshār b.Burd, Abū ‘l-‘Atāhiyah and Abū Nuwās,” *CHAL.*, pp. 275-299.
- Semah, D., “Poetry and its Audience According to Medieval Arab Poeticians,” *Israel Oriental Studies*, 11 (1991), pp. 91-105.
- Sperl, S., Shackle, Ch. (eds.), *Qasida Poetry in Islamic Asia and Africa*, vol. 1: *Classical Traditions and Modern Meanings* (Leiden, 1996).
- Al-Taṭāwī, ‘Abd Allāh, *Thaqāfa Abī Tammām min Shī‘rih* (Cairo, 1984).
- Young, T. de, “Language in Looking-Glass Land: Samīḥ al-Qāsim and the Modernization of *JINĀS*,” *Journal of the American Oriental Society*, 112 (1992).
- 岡崎桂二「バッシヤール・ブヌ・ブルドとバディーウ」『オリエント』35巻2号 (1993年)
- 同 「アラブ古典詩研究」『中東研究』446号、中東調査会、1999年。
- 佐藤信夫『レトリック認識』講談社、1992年。
- 野内良三『レトリックと認識』日本放送出版協会、2000年。

JAL (Journal of Arabic Literature), *CHAL* (‘Abbasid Belles-Lettres: The Cambridge History of Arabic Literature, eds. J. Ashtiany, T. M. Johnstone et al., Cambridge, 1990).